



文化の日に思う

古代中国の王朝の高官（中央の偉い役人）が地方に赴任した時、地元の役人が夜遅く訪ねて来て金塊を手渡そうとしました。「今後ともよろしく」という、いわば賄賂わいろうです。高官が拒むと、役人は「誰も知りませんから。絶対ばれませんが」と耳元でささやきました。すると高官は「天知る、地知る、我知る、子知る」と役人を怒り、金塊をはねつけました。

「このことはすでに天が知っており、地が知っており、私も君も知っている。どうしても誰も知らないなどと言えようか」と公職に就く身である以上、誰が見ていようがいまいが、その本分にもとる行いをしてはならないと諭したといえます。このことは、全ての人々に共有してほしい倫理でもあります。

さて、漢字研究の第一人者しちゅうわいしつかに白川静さんという学者がいきました。

白川さんは「国語との向き

合い方を日本人はどこかで間違えたのではないか」と話しています。

例えば「おもう」という言葉は、私たちは「思」という文字をよく使いますが、もと「思」という字は、おもしろむときに使った漢字だそです。

白川さんによると、深くおもうときの「念」が万葉集では「思」と同じくらい使われているそうです。「おもう」という漢字は、おもしろ浮かべ、おもしろ「想」や、亡くなった人、遠くにいる人をおもう「懐」（懐）などもあります。

「懐」のおもしろは、目からこぼれ落ちる涙が衣をぬらす様子だそです。

漢字の成り立ちを探ってみると、音読みだけの他の国と違って、日本人は訓読みもします。「おもう」にみられるように「おもしろ」を豊かなものにしながら、生活してきたのでしよう。

「家族は互いに念おもい、懐おもわれる。他者に対しては痛みや悲しみを想おもう」

さまざま「おもい」が「思い」という漢字になってしまつてから、人と人との関係や社会が荒すさんでいったのは偶然ではないように思います。日本語が細ほそくなつてはいいな

きまで貧しくなつてはいけません。「おもい」です。漢字は誇るべき文化です。「文字を制限することは思索力を制限すること。貧弱な思索力は政治家の言葉遣いに表れている」

心したい警句です。3日は「文化の日」。心に届く漢字・文字文化、言葉を大切にする日です。言葉に念おもいを寄せ、反省したいと思います。



指宿市長
豊留悦男